

## 清朝官人のイギリス紀行——1870年代を中心に

2011.1.22. 岡本隆司（京都府立大学）

Scarcely any two travellers, however, see the same objects in the same light, or remember them with the same accuracy. What is involved in the darkness to the optics of one man is often arrayed in the brightest colours to those of another. An impression vanishes or endures according to the material that receives it. (*An Embassy to China: Being the Journal Kept by Lord Macartney during His Embassy to the Emperor Ch'ien-lung, 1793-1794*, edited with an Introduction and Notes by J. L. Cranmer-Byng, London, 1962, p. 199.)

「二人の旅人が同じものを同じように見るということも、同じように正確に記憶しているということも、ほとんどない。ある人の目に暗く映ずるものが、他の人の眼にはまるで明るく色もとりどりに見えるということが往々にしてある。ある印象というものは、それを受け取るもの次第で、消え失せもすれば長つづきもする。」（マカートニー著／坂野正高訳注『中国訪問使節日記』平凡社東洋文庫、1975年、246頁）

### 〇はじめに

- ・「出使日記」研究
  - ：思想史研究～清末の在外使節制度と外交史研究
  - ：文献学的研究と視角の転換
  
- ・制度のありよう
  - ～地域の異同
  - =ヨーロッパ・アメリカ・日本
  
- ・駐英公使（出使英國欽差大臣）と出使日記
  - 郭嵩燾 1876-1879 『使西紀程』（劉錫鴻 1876-1877 『英軺私記』）
  - 曾紀澤 1878-1886 『曾侯日記』『使西日記』
  - 劉瑞芬 1885-1890 『西軺紀略』
  - 薛福成 1889-1894 『出使英法義比四國日記』
  - 龔照瑗 1893-1897
  - 羅豐祿 1896-1901
  - 張德彝 1901-1905
  
- ・課題の設定
  - ：なぜ1870年代のイギリスか=史料の系統性とイギリス帝国
  - ～同行の知識人=郭嵩燾・劉錫鴻
  - =同一「帝国」に対する異なるみかた～「帝国」としての清朝中国のありよう

：流動的だったこの時期の世界観・国家構想～外国・参照軸としてのイギリス帝国

・登場人物

正使：郭嵩燾（筠仙）湖南湘陰（1818-1891）

道光 27 年（1847）の進士。1853 年、太平天国に対抗する湘軍を結成した曾國藩に協力し、軍費調達などに従事した。1874 年、日本の台湾出兵にさいし、朝廷の召集をうけて海防の意見書を提出、その後、福建按察使、総理衙門大臣を歴任する。翌年おこった雲南でのイギリス公使館員殺害事件、いわゆるマーガリー事件の謝罪のため、出使英国欽差大臣に任命された。謝罪の任をおえると、そのままロンドン常駐の公使となり、駐仏公使をも兼ねた。1879 年はじめ任を終え帰国したが、かねて非難を受けていたため、上京せず、まっすぐ郷里に帰り、そこで余生を送ることになる。

副使：劉錫鴻（雲生）廣東番禺（生没年未詳）

道光 28 年（1848）の挙人、1866 年、刑部員外郎に任ぜられる。1876 年に三品銜候補五品京堂、光祿寺少卿となって、出使英国副使に任命されて渡欧した。翌年、駐独公使に異動、1878 年に解任され、帰国後、1880 年に通政使司参議となる。1881 年 3 月、李鴻章を弾劾して西太后の怒りに触れ、罷免された。以後の事蹟は未詳である。

三等参贊：黎庶昌（莼齋）貴州遵義

三等繙譯：徳明（在初）漢軍鑲黄旗（のち張徳彝と改名）

鳳儀（夔九）蒙古正黄旗

マカートニー（Samuel Halliday Macartney, 馬格里（清臣））

随員兼繙譯：張斯恂（聽帆）浙江慈谿

随員：劉孚翊（和伯、鶴伯）江西南豐

姚嶽望（彦嘉）江蘇陽湖（辦理支應官）

李荊門（湘浦）江蘇甘泉

黄宗憲（玉屏）湖南新化（監印官）

随行：ヒリヤー（Walter Henry Hillier, 禧在明）イギリス公使館二等通訳官

・旅程

光緒二年十月十七日～十二月初八日（1876 年 12 月 2 日～1877 年 1 月 21 日）

十月十七日（12 月 2 日）上海出発

十月二十一日（12 月 6 日）香港到着

十月二十三日（12 月 8 日）香港出発

十月二十八日（12 月 13 日）シンガポール到着

十月二十九日（12 月 14 日）シンガポール出発

十一月初六日（12 月 21 日）コロンボ到着

十一月初七日（12 月 22 日）コロンボ出発

十一月十五日（12 月 30 日）アデン到着

十一月十六日（12 月 31 日）アデン出発

十一月二十一日（1877 年 1 月 5 日）スエズ湾到着

十一月二十四日（1 月 8 日）ポートサイド到着、地中海に入る

十一月二十八日（1 月 12 日）マルタ島到着

十二月初三日（1月16日）ジブラルタル到着  
十二月初四日夜（1月17日）リスボン沿岸を通過  
十二月初五日夜（1月18日）フィニステレ岬を通過  
十二月初七日（1月20日）英仏海峡に入る  
十二月初八日（1月21日）サザンプトン到着

## I 郭嵩燾『使西紀程』

### ○内容

：赴任の旅程を記した日記体の著作（光緒年間刊行）  
～『郭嵩燾日記』湖南人民出版社、全4巻、1981-83年。「『使西紀程』原稿」を含む  
①旅程記録～任地に着くまでの風物の紹介＝ガイドブック的な役割  
②意見書～当時の郭嵩燾の政見・世界観をあらわす

### ○みどころ

光緒二年十月二十日（1876年12月5日）

彬彬然見禮讓之行焉。足知彼土富疆之基之非苟然也 [中國之不能及、遠矣]。

彬彬然と禮讓の行はるるを見たり焉。彼土の富強の基の苟然に非ざるを知るに足るなり  
[中國の及ぶ能わざること、遠し矣]。

二十一日（1876年12月6日）

其規條整齊嚴肅、而所見宏遠、猶得古人陶養人才之遺意。 [中國師儒之失教、有愧多矣、爲之慨歎。]

其の規條は整齊嚴肅、しかも所見宏遠なり、猶ほ古人の人才を陶養するの遺意を得たるがごとし。 [中國の師儒の失教、愧有ること多し矣、之が爲に慨歎す。]

二十二日（1876年12月7日）

所以不可及、在罰當其罪、而法有所必行而已。

及ぶべからざる所以は、罰その罪に当たり、しかも法必ず行はるる所有るに在るのみ。

十一月初七日（12月22日）

西洋之開闢藩部、意在坐收其利、一切以智力經營、囊括席捲、而不必覆人之宗、以滅其國、故無專以兵力取者、此實前古未有之局也。

西洋の藩部を開闢するや、意、坐して其の利を收むるに在り、一切智力を以て經營し、囊括席捲す。而れども必ずしも人の宗を覆へし、以て其の國を滅さず。故に専ら兵力を以て取る者無し。此れ實に前古に未だ有らざるの局なり。

十一月十三日（12月28日）

英人謀國之利、上下一心、宜其沛然以興也。

英人は國の利を謀ること、上下心を一にす。其の沛然として以て興るも宜なり。

十一月十四日（12月29日）

亦見西洋列國敦信明義之近古也。

亦た西洋列國の信に敦く義に明らかなるの古に近きを見るなり。

十一月十八日（1877年1月2日）

南宋以後、邊患日深、而言邊事者、峭急褊迫、至無以自容。程子大儒、論本朝五不可及、一曰「至誠待夷狄」。北宋以前、規模廣博、猶可想見。孟子固曰「以大事小者、樂天者也。以小事大者、畏天者也」。而引湯事葛・文王事昆夷、以爲樂天。漢高祖一困平城而遣使和親、唐太宗至屈尊突厥。開國英主、不以爲諱。終唐之世、周旋回紇・吐蕃、隱忍含垢。王者保國安民、其道固應如此。以夷狄爲大忌、以和爲大辱、實自南宋始。然而宋明兩朝之季、其效亦可睹矣。

西洋立國二千年、政教修明、具有本末、與遼金崛起一時、倏盛倏衰、情形絕異。其至中國、惟務通商而已。而窟穴已深、逼處憑陵、智力兼勝、所以應付處理之方、豈能不一講求、並不得以和論。無故懸一「和」字以爲劫持朝廷之資、侈口張眼、以自快其議論、至有言寧可覆國亡家、以不可言和者、京師已屢聞此言。召公之戒成王曰「祈天永命」。祈天者、兢兢業業、克抑貶損、以保國安民爲心。誠不意、宋明諸儒議論流傳、爲害之烈、一至斯也

南宋以後、外患は日まじに深刻になったけれども、外敵に対する議論は、強硬一辺倒で、とても受け入れられないものとなってしまった。大儒程頤は宋朝の空前の長所を五つとりあげ、その一つに「夷狄に至誠をつくした」（『二程全書』「遺書」十五）という。北宋以前にはなお、見識は広がったことが想像できるだろう。孟子ももちろん、「大を以て小に事える者、天を楽しむ者なり。小を以て大に事える者は、天を畏れる者なり」といい、あわせて、殷の湯王が無道な葛伯につかえ、周の文王が犬戎につかえた事例を引いて、これらを「天を楽しむ」ものだとしている（『孟子』梁惠王下）。漢の高祖は平城で匈奴に敗れると、使者を派遣して和親をはかった。唐の太宗は膝を屈して、突厥を尊ぶことさえした。王朝を建てた英主なら、タブーとはしなかったものである。唐の末年にも、ひそかに恥を忍んで回紇・吐蕃と交際した。王者とは国を保ち民を安んずるもの、その道はもとよりこうでなくてはなるまい。夷狄を大なる禁忌とみなし、これと和睦するのを大なる恥辱と考えるのは、じつに南宋から始まった。しかしながら南宋・明朝の末路をみれば、その結果はやはり明らかではないか。

西洋は国を立てて二千年、政教は公明正大、「本」も「末」も兼ねそなわっている。崛起したかと思えば、たちまち栄え、たちまち衰えた遼や金など、昔の夷狄のありようとはまったくちがうのである。西洋が中国にやって来るのは、通商が目的でしかないけれども、すでに堅固な拠点を有し、近くに迫って圧迫を加えており、智と力は兼ねて勝っているから、これに対処する方法は、まったく研究しないわけにはいかないし、和睦を講じられない、というわけにもいかない。それにもかかわらず、自らその議論を痛快にしようと、何の理由もないのに、「和」という一字をあげつらって朝廷を脅かし、大言壮語、そのあげく「朝廷を亡ぼしても、和睦を口にしてはならぬ」などと言う者が出ている。北京で実際にしばしばこんな議論を耳にした。周の時代、召公は成王を戒めたとき、「天に永命を祈る」とおっしゃった（『尚書』召誥）。「天に祈る」とは、国を保ち民を安んじることを第一に考え、失敗をしないよう慎重にも慎重を期すことであろう。これほどまで、宋・明の儒者どもの議論が流布し、ひどい害をおよぼしているとは、思いもよらなかった。

十二月初六日（1877年1月19日）

西洋以智力相勝、垂二千年。麥西・羅馬・麥加、迭爲盛衰、而建國如故。近年英・法・俄・美・德諸大國、角立稱雄、創爲萬國公法、以信義相先、尤重邦交之誼、致情盡禮、質有其文、視春秋列國、殆遠勝之。……輕重緩急、無足深論。而西洋立國、自有本末、誠得其道、

則相輔以致富彊、由此而保國千年可也。不得其道、其禍亦反是。班固匈奴傳贊有曰「來則以禮接之、畔則以兵威之、而常使曲在彼」。處爭奪猶然、而況其所挾持者尤大而其謀尤深者乎。劉雲生自謂能處洋務、至是亦自證其所知之淺、而曰「處今日之勢、惟有傾誠以與各國相接、舍是無能自立者」。

西洋は二千年近くにわたり、智と力とをつくり、しのぎをけずってきた。エジプト・ローマ・イスラームが盛衰あいつぎながらも、滅ぶことなく、存続している。近年では、イギリス・フランス・ロシア・アメリカ・ドイツの列強が、並立して競い合いながらも、万国公法をつくって信義を優先し、何より国と国との友好関係を重んじている。情誼を伝え礼儀をつくすのは、文質彬彬とそなわっていて、春秋の列国よりもはるかに勝っているといえよう。……何が重要か緊急かは、深く立ち入っている暇はないけれども、しかし西洋の立国には、当然に「本」と「末」とがあって、もしその事情をつかめれば、富強を実現する助けとなり、それを通じて、むこう千年は国を保っていけるだろう。つかめなければ、やはりこれとは逆の災禍がふりかかるだろう。『漢書』匈奴伝の末尾に作者の班固が、「夷狄が恭順に出て来れば礼遇し、背いたなら武力示威する。こうして必ず夷狄に非があるようにしむける」とコメントしている。むかし争いに対処するのでさえこうなのだから、今いっそう大きな脅威となり、さらに深い謀略をひめている西洋諸国に対しては、なおさらそうであろう。劉雲生〔劉錫鴻〕などはかねて、西洋諸国に対処できる、と自任していた人物であるが、ここに至って、かれも自分の見聞がいかに浅薄だったかをさとって、「今日の情勢に対処するには、誠意をつくして各国とつきあっていくほかない。これを捨てて独立を保ってはいけないだろう」といっている。

・『郭嵩燾日記』より

光緒三年十一月十八日（1877年12月22日）

略考英國政教原始：議院之設在宋初、距今八百餘年。至顯理第三而後有巴力門之稱、即今之上議院也。一千二百六十四年、令諸部各擇二人、海口擇四人、入巴力門會、爲今下議院所自始。買阿爾之設在一千八百十年後設立倫敦買阿爾衙門、令民自選。……計英國之強、始自國朝、考求學問以爲富強之基、亦在明季、後於法蘭西・日耳曼諸國。創立機器、備物制用、實在乾隆以後。其初國政亦甚乖亂。推原其立國本末、所以持久而國勢益張者、則在巴力門議政院有維持國是之義、設買阿爾治民、有順從民願之情。二者相持、是以君與民交相維繫、迭盛迭衰、而立國千餘年、終以不敝、人才學問、相承以起、而皆有以自效、此其立國之本也。而巴力門君民爭政、互相殘殺、數百年久而後定、買阿爾獨相安無事、亦可知爲君者之欲易逞而難戢、而小民之情難拂而易安也。中國秦漢以來二千餘年、適得其反。能辨此者、鮮矣。

イギリスの政教を起源から論じよう。議会は中国の宋初、今から八百年あまり前に設立された。ヘンリー三世の時代になって以後に巴力門という名称ができた。これがいまの上院である。1265年、各州から二人、都市から二人を選んで、<sup>パーラメント</sup>巴力門に加入させた。これが今の下院の起源である。<sup>メイヤー</sup>買阿爾（市長職）の設置は1180年以降であり、<sup>ロンドンメイヤー</sup>倫敦買阿爾衙門（ロンドン市庁舎）が建てられ、民みずからに選任させた。……イギリスが強くなったのは、わが清朝時代からだと思う。明末に学問を研究して富強の基礎をきずいたが、そのときはフランスやドイツ諸国に遅れをとっていた。機械を發明して「物を備え用を致す」（『易』繫辭

上) ようになったのは、じつに乾隆以後であって、当初は国政もきわめて乱れていたの  
ある。イギリス立国の「本」と「末」を追究してみると、それでも持ちこたえて勢力が盛  
んになっていったのは、<sup>パルラメント</sup>巴力門が政治を議論して、国是の本義を保ち、<sup>イイヤー</sup>買阿爾を設けて民  
を治め、民の願うところに従っているからだとわかる。この二者が譲らず行われたがため  
に、君民たがい提携しあい、建国から千年あまり、盛衰はこもごもあっても、疲弊しき  
ってしまうこともなく、人材・学問があいついで興って貢献できたのである。これがその  
立国の「本」にはほかならない。しかし<sup>パルラメント</sup>巴力門では、君民が政権を争って殺戮しあい、数百年  
をへてようやく安定した。平穩無事だったのは<sup>イイヤー</sup>買阿爾だけなのであって、ここからも君  
たる者は欲をほしいままにしがち、小民は従順であることがわかる。〔だから君よりも民  
を重んじなくてはならないのに、〕中国では秦漢以来、まるで正反対になっている。この  
あたりの機微に気づく者はほとんどいない。

光緒四年二月初二日（1878年3月5日）

近年波斯國主遊歴倫敦、君主亦贈以寶星。代謨斯新報頗譽之、曰「哈甫・色維来意斯里、  
何足以當寶星」。蓋西洋言政教修明之國曰色維来意斯得、歐洲諸國皆名之。其餘中國及土  
耳其及波斯、哈甫色維来意斯得。哈甫者、訳言得半、意謂一半有教化、一半無之。其阿非  
利加諸回國、曰巴爾比里安、猶中國夷狄之稱也、西洋謂之無教化。三代以前、獨中國有教  
化耳。故有要服・荒服之名、一皆遠之於中國而名曰夷狄。自漢以來、中國教化日益微滅、  
而政教風俗、歐洲各國乃獨擅其勝、其視中國、亦猶三代盛時之視夷狄也。中國士大夫知此  
義者、尚無其人、傷哉。

最近、ペルシア皇帝がロンドンにきて、イギリス国王も勲章を贈った。『タイムズ』紙は、  
「<sup>ハーフ・シヴィライズド</sup>ハ甫・色維来意斯得 [half-civilized] だから、勲章に値しない」と譏っている。西洋では、  
政教の公明正大な国を<sup>シヴィライズド</sup>色維来意斯得 [civilized] といい、ヨーロッパ諸国はみな、そう名の  
っている。ヨーロッパ以外の中国・トルコ・ペルシアは、<sup>ハーフ・シヴィライズド</sup>ハ甫・色維来意斯得である。ハ甫  
とは「半ばを得る」の訳であり、教化が半ばあり、半ばない、との意味になる。アフリカ  
のムスリム諸国は、<sup>バーバリアン</sup>巴爾比里安 [barbarian] という。中国で夷狄というのと同じように、こ  
れが西洋で、教化がない、との意である。三代（夏・殷・周）以前には、中国にしか教化は  
なかった。ゆえに〔王城からはるかに隔たった、天子の感化の及ばない地に〕要服、荒服  
という呼び方があり、中国から遠ざかれば、いっさいそれを夷狄と名づけておけばよかつ  
たのである。ところが漢以来、中国の教化は日まじに衰え、政教風俗はヨーロッパ各国の  
みが優越するようになり、あたかも三代の盛時に夷狄をみていたような目で、中国のこ  
とを見ているのである。中国の士大夫でこうした議論を知る者はいない。悲しいことではな  
いか。

#### ○郭嵩燾の観点

- : 「官民」の垂直的構造・「華夷」の空間的構造
- = 世界（観）・秩序（観）の動揺とイギリス帝国
- ～中国の頽廢：「民」「夷」の軽視～「南宋」以来の末期的現象

## II 劉錫鴻『英軹私記』

### ○内容と特徴

～イギリス滞在記・見聞記・英国便覧＝『使西紀程』とは異なる

- ①西洋事情の詳細な記述
- ②中国への導入不可という主張

### ○みどころ

#### ①西洋事情

光緒三年正月十二日（1877年2月24日）

人無業而貧者、不令沿街乞丐、設養濟院居之、日給饗餐、驅以除道造橋諸役。故人知畏勞就逸、轉致自勞而自賤、莫奮發以事工商。國之致富、亦由於此。

人業無くして貧なる者、沿街に乞丐せしめず、養濟院を設けて之に居らしめ、日び饗餐を給し、驅るに道を除し橋を造るの諸役を以てす。故に人、勞を畏れ逸に就くは、轉じて自ら勞して自ら賤しきを致すを知り、奮發し以て工商を事とせざる莫し。國の富を致すも、亦た此に由る。

人無業而貧者、不令沿街行乞、收入養濟院而衣食之、日督作工、以勞其體。因人畏勞就逸、轉致自勞而自賤、故莫奮發以事工商。（張德彝『四述奇』光緒三年三月二十八日条）

：「國之致富、亦由於此」と評しているのは劉～「道」の重視（溝口）

#### ②導入不可の主張：日本の前大蔵大輔井上馨との会談

光緒三年二月二十七日（1877年4月10日）

井上馨來、與正使並接晤之。井曰「中國寶藏實多、何爲貨棄諸地、胡不效西法改弦而更張之」。正使未及答、余曰「且君之綜司戶部、亦嘗革戶部之弊政否」。答曰「甚願與革、衆不我從」。余曰「此非衆之好爲疑沮也。祖宗制法、皆有深意、歷年既久、而不能無弊者、皆以私害法之人致之。爲大臣者、第能講求舊制之意、實力奉行、悉去其舊日之所無、盡還其舊日之所有、即此可以復治。若改弦而更張、則驚擾之甚、禍亂斯生、我中朝敢不以貴國爲戒乎。金銀煤鐵等礦、利在焉、害亦存焉。非聖天子所貪求也」。井唯唯。

井上馨が來訪し、正使の郭嵩燾といっしょに面会した。「中國には資源がじつに多いのに、どうして捨て置いたままにしているのですか。西洋のやり方にならない、改革してはいかがですか」と井上がいうと、正使が答えないうちに、わたしが言った。

「あなたが戸部（大蔵省）をとりしきっておられたとき、戸部の弊政を改革なさいましたか。

「改革したいと切望したのですが、だれもついてきませんでした」

「それは何も、みな好んで妨げたわけではありません。祖宗の制法にはいずれも深意があります。長い年月のうちには、どうしても弊害がおこってきますが、それはすべて私心で法をそこなおうとする人のせいです。大臣たる者、できるのは、もともとの制度の意図を研究して、全力で実行し、元来にはなかったものをいっさい排して、すべてをもとのとおり還元するしかありませんが、それでただちに治世が回復します。改革をやれば人々を驚かせて混乱をまねき、内乱さえ生じかねません。我が中朝は貴国を戒めとせざるをえません。金・銀・石炭・鉄鉱などは確かに利がありますが、害もあるものです。聖天子があく

まで求めるものではございません」。井上はうなづくばかりだった。

: ①と②の併存、①より②のほうが積極的→そうした論理構成の由来？

光緒三年二月二十八～三十日（1877年4月11日～13日）：「光學・電學・熱學・重學」  
……此皆英人所謂實學、其於中國聖人之教、則以爲空談無用。中國士大夫惑溺其說者、往往附和之。余爲之辨曰「彼之實學、皆雜技之小者。其用可製一器、而量有所限者也。……中國自秦漢以迄元明、修其教則治、淪其教則亂。其治也、遐荒向德、重洋慕化、仁義之風、遂漸及於四裔。其亂也、人多驚利而尚力、海內糾紛。然君臣父子兄弟夫婦朋友之倫、儼然猶存、非甚不肖。猶知顧畏仁義、不敢過肆其桀驁。……

今西洋之俗、以濟貧拯難爲美舉、是即仁之一端、以仗義守信爲要圖、是即義之一端。……非然者、一意講求雜技、使趨利之舟車・殺人之火器、爭多競巧、以爲富強、遽謂爲有用之實學哉。

……此其理非可驟語而明。究其禁雜技以防亂萌、揭仁義以立治本、道固定萬古而不可易。彼之以爲無用者、殆無用之大用也夫。

……これらはすべて英人のいわゆる實學であり、中国聖人の教を空談無用とみなす。中国の士大夫にもこの説に惑溺し、往々にして附和する者がいるので、説明したい。かの實學とはすべてつまらない雜技である。一器を製ることのできる効用はあっても、たかが知れたものだ。……中国は秦・漢から元・明にいたるまで、その教を修めれば治まり、その教を淪てれば乱れる。治まったときは、遠方から海を越え徳化を慕って来るので、仁義の風が四裔にまで及んでゆく。乱れたときは、利をもとめ力をたつとぶ人が多くなって、天下が紛糾する。……

いま西洋では、貧窮を救うのを美挙だとする風習があつて、これは仁の一端にほかならない。また信義を守るのを重要だとする風習もあつて、これは義の一端にほかならない。……そうでない者がひたすら雜技を研究して、利益が目的の船車や殺人が目的の火器の数量と精巧さを競うようになり、これを富強だと思ひ込んでいるが、それがとりもなおさず有用の實學であるといえようか。

……ともあれ聖人は、乱のおこるのを未然に防ぐために雜技を禁じ、治の根本を打ち立てるために仁義を掲げられ、これで道は堅固に定まって万古不易のものとなった。外国で無用だと思われているものは、じつは無用の大用というべきものなのである。

: 「實學」＝「雜技之小」＝「西學」≠「富強」

～西洋にも「仁義」あり＝「富強」～中国とは異なる

光緒三年四月十五日（1877年5月27日）：「<sup>ペルシア</sup>波斯藩王」との会見

……曰「中國現與喀構兵、徒利俄人。覽天下大勢、俄英之強、皆未有艾。而貴國與敵國、乃以弱承之、將來必爲所併、第不知歸英抑歸俄耳」。余曰「是必不然。天道禍盈而福謙。如俄之貪噬無厭、安知不奪其魄、使之驟致喪敗、若拿破侖之滅亡、強弱勝敗、何常之有。大清威行四裔、殆二百年、自咸同間、蝥賊內訌、財力稍困。朝廷顧惜民命、不肯黷武於外洋、其勢遂似於弱。今掃海內、漸靖西陲、武功既成、一意政教、不及數年、綱維大張、國威自可復振。貴國君臣、苟能發憤、事亦如之。何至遽被蠶食於彼暫強者乎」。王曰「中國孔聖之教、禁人言利、戒人尚力、知斂退而不知奮進、故易弱其國也」。余曰「是更不然。

孔聖之戒言利、爲斂財害民者耳。其禁尚力、亦爲恃強肆惡者耳。足食足兵、治國何嘗不務富強。但所以致富強者、准繩乎仁義之中、故其教爲萬古所不能易。中國歷朝、強盛由此、我大清乾隆以前、遐荒效順、重洋慕化、亦由於此。今英國知仁義爲本、以臻富強、未始非由久入中國、得聞聖教所致、奈何以爲貽害也。

……「中国がいまカシュガル（ヤクープ・ベク政権）と交戦しているのは、ロシアを利するだけである。世界の大勢をみるに、ロシアとイギリスの強さは底が知れない。衰勢にある貴国と我が国は、その圧力をうけており、近いうちにきっと併呑される。英露どちらに併呑されるかがわからないだけなのである」。

「全くの誤りだ。「天道は盈を禍わざわいして謙さいはひに福す」（『易』謙）。貪欲あくなきロシアでも、魂までは奪えず、ナポレオンの滅亡のように、にわかには衰滅させられることを知るまい。強弱勝敗は常ないものである。大清は二百年もの間、その威は四裔にゆきわたったが、咸豊・同治年間より内乱がおこって、財力が次第に苦しくなった。朝廷は民の命を大事に思って、対外的に武威を誇るようなマネは慎んだので、弱体化したようにみえたかもしれない。いま天下はきれいになり、西辺平定をおもむろにすすめつつある。武功が成ったあかつきには、政教に専心して、数年のうちに綱紀は大いにひきしまり、国威も自ずからふたたび振るうようになろう。貴国の君臣も発憤すればそうなれるはずで、一時的に強盛な国に蚕食されるがままにはなるまい。

「中国の孔子の教えは、利を言うのを禁じ、力をたつとぶのを戒めており、二の足をふんで退くばかり、勇敢に進むことを知らない。だから国が弱体化しやすいのだ」。

「いよいよ間違っている。孔子が利を言うのを戒めたのは、財を搾取して民を苦しめるからであり、力をたつとぶのを禁じたのは、強さにたのんで悪逆のかぎりをつくすからである。食糧と軍隊を充足させるのだから、国を治めるには、富強につとめないわけではない。ただし富強をもたらすには、中庸をえた仁義をよりどころとするから、その教が万古不易となるのである。中国の歴代王朝が強盛になったのも、このためであり、我が大清の乾隆以前、遠方から海を越え徳化を慕って来たのも、やはりこのためである。いまイギリスが仁義を根本として富強を実現したのは、以前から中国に来て、聖人の教えを聞き知ることができたからでもあるのだ。……」。

：「孔聖の教」「治」「仁義」「富強」の関係

＝中国と西洋との関係～対外観念「乾隆以前」の位置

## ○まとめ

：清末知識人の世界観の転換？

＝二人とも渡航以前の政見・世界観の堅持：中国の伝統的「政教」の位置づけ

：イギリス帝国への「まなざし」

＝物質的「洋務」に非ざる観点～「政教」への注視

＝「帝国」と近代国家～「中体西用」「附会論」

【参考文献】

*The First Chinese Embassy to the West: the Journals of Kuo Sung-Tao, Liu Hsi-Hung and Chang Te-yi*, translated and annotated by J. D. Frodsham, Oxford, 1974.

鍾叔河「“用夏變夷”的一次失敗」、同主編『走向世界叢書——劉錫鴻：英軺私記・張德彝：隨使英俄記』嶽麓書社、1986年。

溝口雄三「ある反「洋務」——劉錫鴻の場合」、同『方法としての中国』東京大学出版会、1989年。

佐々木揚『清末中国における日本観と西洋観』東京大学出版会、2000年。

張宇權『思想與時代的落差——晚清外交官劉錫鴻研究』天津古籍出版社、2004年。

小野泰教「郭嵩燾・劉錫鴻の士大夫観とイギリス政治像」『中国哲学研究』第22号、2007年。

拙編『中国近代外交史の基礎的研究——19世紀後半期における出使日記の精査を中心として』平成17～19年度科学研究費研究成果報告書、2008年。

拙訳「使西紀程、郭嵩燾日記（抄）」「西洋に倣った鉄道の導入に反対する上奏」『新編原典中国近代思想史 第2巻 万国公法の時代——洋務・変法運動』村田雄二郎責任編集、岩波書店、2010年、25～32、87～104頁